

新しく出てきたAI技術との向き合い方

ジュニア会員の皆さん、こんにちは。今回のコラムを担当する宇部高専の三澤です。今回のコラムでは、入力された文から画像や文を作り出すことができる生成系AI (generative AI) について取り上げます。

ジュニア会員の皆さんは、対話型AIや画像生成AIを使ったことがありますか？ Stable DiffusionやMidjourneyなどの画像生成AIは、キーワードや文章から簡単に綺麗なイラストや画像を生成できると今年の夏頃に話題を集めていました。画像生成AIについては、さらに進化を続けているものの、特定分野での利用に留まること、フェイク画像の生成や学習に用いた画像データの著作権問題などもあり、対話型AIに比べると、少しブームは落ち着いているように感じます。

一方、対話型AIについては、2022年11月にOpenAIのChatGPTが登場して以来、次々に新しい話題が出てきており、いまだに注目を集めています。ChatGPTの月間アクティブユーザー数が登場から2ヶ月で1億人を突破したことも話題になりました。注目されている理由としては、大規模言語モデルと呼ばれるモデルを用いることで、私達が普段使っている自然言語で、いろいろな作業を指示できることにあると思います。自然言語でのプログラミングと呼んでいる人もいます。ChatGPTでは、自然言語で指示文を書くことで、文章の生成・要約、質問応答、翻訳、プログラムのコード生成などができます。例えば、「電子情報通信学会のジュニア会員になるにはどうすればよいですか？」と質問すると、回答が返ってきて、その回答にさらに質問をするといった対話形式で調べることができます。また、プログラムのコード生成の例として、例えば、ファイルからデータを読み込んで散布図を描きたいときに、「data.csvからデータを読み込んで散布図を描くPythonプログラムを教えてください。」と質問すると、散布図を描くためのコードの例と、その動作について簡単な説明が出力されます。このように、自然言語で指示文を書くことで簡単に作業を実現できることにより、これまでの勉強や仕事の仕方を変えるものと考えられています。インターネットやスマートフォンが登場し、私達の生活が大きく変化したように、対話型AIを用いた様々なサービスが開発されることで、私達の生活が大きく変わっていくのではないかとされています。

2023年3月には、Open AIからさらに進化したGPT-4という大規模言語モデルが発表されたり、MicrosoftからはGPT-4を採用したAIを利用した検索エンジンBing AIが発表されたりしました。さらに、Microsoftは、3月にMicrosoft 365に大規模言語モデルGPT-4の機能を取り入れたMicrosoft 365 Copilotを今後リリースすることを発表しています。Copilotは副操縦士という意味で、ChatGPTのように言葉で指示することでWordやExcelの作業を助けてもらうことができるということです。これらも、生産性向上ツールとして注目されています。

注目されている対話型AIは、それらしい回答をしてくれますが、常に正しい回答をするわけではないため、正しいかどうかを判断できるだけの知識や本当に正しいかどうかを問う批判的思考が必要です。例えば、上で例として挙げた「電子情報通信学会のジュニア会員になるにはどうすればよいですか?」という質問に対しては、ChatGPTでは誤った回答が返ってきました（この例では、Bing AIでは正しい回答が返ってきました）。また、適切な指示文を書けないと目的とする結果が得ることができません。これは、プログラムは正しく指示しないと思い通りに動かないという点と同じであり、自然言語でのプログラミングと呼ぶ人がいることも納得できます。ちなみに、現時点では、ChatGPTの利用には年齢制限があり、13歳以上であることが必要で、18歳未満の場合は、親か法定後見人の許可が必要とのことです。

4月に入り新学期を迎え、一部の大学からは、生成系AIの利用についての注意喚起や留意事項などが出され始めました。文部科学省も学校現場でのChatGPTなどの取り扱いに指針を作るとも言われています。生成系AIの活用によって、あらゆる分野での生産性向上が期待されていますが、新しく出てきた情報系の技術・ツール・サービスを正しく使いこなすためには、情報リテラシーや批判的思考力の向上が重要です。AI関連のツール・サービスを正しく使いこなすためにも、この使い方は正しいだろうかと自問するとともに、AIリテラシーやAI倫理についても一緒に学んでください。

(宇部工業高等専門学校 三澤秀明)

